

美人論序説-「美人」はいかに語られるのか

馬場伸彦

(甲南女子大学文学部)

はじめに

本稿は、「美人」とは何か、また美人はいかに語られてきたのかを考察する序論としての役割をなす。さしあたり、美と美人に関するさまざまな知見を横断することで、美醜を判断する基準が何であるのかを考察する。

1 美人に関する見解

「美人」に関する文献を概観すると、だいたい二つの見解に分かれている。すなわち、“美人は人種、文化によってその判断基準は大きく異なる”という見解と“美人には人種、文化、歴史を超えて普遍的な基準が存在する”という見解である。

前者には文化人類学における異文化接触に関する研究がその根拠となる。たとえば、ダーウィンは、人体の美について、普遍的な基準が人間の心のなかにあるのではなく、文化の違いによって美醜の評価が異なると指摘している。また、レヴィ＝ストロースは、ブラジルのカドゥヴェオ族の身体塗飾を分析し、顔への塗飾が「自然」とは関係なく、慣習的な規準に従って施され、左右対称の顔を人工的に変化させることで、エロティックな魅力が強化され、部族の美意識に強く影響するのだと述べている。

現代美人の特徴をほっそりとした体型と小さな頭部、二重瞼の大きな目に口角の上がったほどよいサイズの口であると仮定すれば、首を長く変形させたり、臀部を奇妙なほど大きく強調させたり、下唇を肥大化させたりする部族の身体変容は、一般的な「美人」概念の対極の相貌をわざわざ人工的に作りだしているかのように思われる。肢体や顔の加工が、現在の美的規範からあまりにも「逸脱」しているからだ。しかし、文化人類学的に身体を観察すれば、美人はけっして画一的なものではなく、多様な様相を示していることがわかる。いずれの場合も、その共同体が育んだ文化的規範に則した「理想の美」に準じて身体を変容させた結果にはちがいない。換言すれば、美しいという評価は、手つかずの「野生」や「動物的」なものではなく、「人工的」な変容のなかに生じるのである。

後者の見解は、「美人」には普遍的な美の概念が映し出されているとするものである。これには、芸術における美学的規範や優生遺伝学、ならびに動物行動学などの観点から主張されることが多い。種の保存のために、人は優れた遺伝子を選ぶのであり、それが外貌に表徴しているのが「美人」なのである。しかし突き詰めて考えると、両者はさほど差がないようにも思われる。美醜の峻別や判断は可能であるように思えるものの、選択の基準は生物学的、精神科学的、文化的、ならびに記号操作などの多様な要因によって複合的に判断されており、それらの影響力がどの程度の割合で働いているのかなど、はっきりと分からないのだ。

そこで後者の見解を後押しするため、しばしば引き合いに出されるのがフロイトの精神分析学である。フロイトの『性欲論三篇』¹のなかで、「美」という概念は性的な興奮に起源をもつもの、すなわち「美」とはもともと性的に刺激するものであると述べている。性器そのものに最も激しい性的興奮をひきおこすにもかかわらず、決してこれを美しいとみなさない。フロイトによれば、「動物」から「人間」に向かう過程で、すなわち文明化の過程において性器は、嗅ぐ段階から見る段階へと移行し、視覚が支配的になってくるにつれて醜悪なものとして退けたという。その結果、人の性器は美に向かう過程の中で隠蔽され、動物的なもの

¹ フロイト『フロイト著作集5 性欲論・症例研究』人文書院、1969年1月所収

して留まったのであり、一方、性器以外の表面である顔や手足などは、露呈され、美の条件に合わせるための人工的な身体変容を目指すことになったという。

こうした意見はフランスの哲学者ジュールジュ・バタイユにも受け継がれている。バタイユによれば、美の判定は「男も女も一般に、その資格好がどれだけ動物から遠ざかっていつかに応じて」行われ、体毛が薄く、なめらかな肌を持ち、動物から遠く離れていることが美の条件となるという。

とりわけ類人猿の姿は醜い。女の姿のエロティックな価値は、手足の物質的使用や骨格の必然性を想起させる自然的な重苦しさが消えていることに関係していると私には思える。資格好が非現実的となればなるほど、それは動物の真実に、人体の生理学的な真実に従属しなくなる。そしてよりよく、望ましい女のイメージに、かなり広くゆきわたっているそのイメージに近づくことになる。²

そうであるならば、美を感受することは、常にエロスの発動と結びついていることになる。魅力的であるということは、性的に刺激的であることと同義なのだ。言い換えれば、「美人」を求める心は、性的な欲望と切り離すことはできないのであり、種の保存本能と結びついた本源的な行為ということになる。美人の本質を探求した文化史家フランセット・パクトーは、フロイトの「昇華」という概念を援用しながら、「文化的生産物に注がれるエネルギーは、もともと性的だった目標から向きを転じた性的エネルギーなのである」と述べている。³「美人」とは「魅力」がある人のことであり、それはまた「性的にひきつける力」を持った選ばれし人であることを意味している。だが、果たして、そうかだろうか？ 遺伝子や種の保存に求める美人語りは、印象批評であることを承知で言えば、あまりにも味気ない。

2 美醜判断と文化

美醜の評価や判定に対して文化圏間の差異が反映することは、日本の絵画表現のなかにも容易に見出すことができる。南蛮人を描いた日本近世の絵画は数多く残っているが、大抵の場合、欧米人の容貌は白色人種といっても、まるで妖怪のようにひどくグロテスクに誇張されて描かれている。その一方で日本人女性は浮世絵の美人画にみられる様式に従って、いわゆる“引目鉤鼻”に描かれており、人物の個性は捨象されているのだ。こうした顔の様式化は江戸時代の美人画で好まれたモチーフである「山姥」でも同様で、山中に棲む鬼女の顔でさえ、性的に魅了する遊女とほとんど区別なく描かれている。

容貌を客観的に記録する写真のない時代では、美醜は絵画の様式に従って描き分けられ、「美人」は記号的に表現される。だから山姥にしても遊女にしても、女性はかくあるべきという「絵画的規範」に従って描かれ、師匠から弟子へと受け継がれていったのである。浮世絵の顔には個性美を語るリアリズムが追求されているわけではない。それは曖昧で漠然とした「美人」で良いのであり、むしろ仕草や衣装や小物などのディテールが重要視される。情景や場面を報告する物語を描くことが主であるから、顔は能面のように驚くほど無表情になる。この傾向は明治期中頃まで受け継がれ、たとえば明治時代におけるベストセラー小説である尾崎紅葉の『金色夜叉』の挿絵でさえ、芸者である女の顔は浮世絵の美人画のままであり、芝居の舞台上で見得を切るような仕草によって強調されている。

では、なぜ日本人は様式的に美しく描かれ、「南蛮人」は醜く描かれるのだろうか。日本と中国の美人観を比較した張競によれば、「二つの人間集団の美醜について判断を下す場合、両集団のあいだの序列関係、あるいは力関係が必ず読み込まれ」、「文明が発達した民族は容貌が美しい」と思われるのだが、「後進性を自覚していなかったときには、自分のことを醜いとは思わない」のだという。⁴外国人を意味する「南蛮人」という

² ジョルジュ・バタイユ『エロティシズム』酒井健訳、筑摩書房、2004年1月

³ フランセット・パクトー『美人-あるいは美の症状』研究者出版、1996年10月、112ページ

⁴ 張競『美女とは何か 日中美人の文化史』角川文庫、平成19年8月

言葉から推測できるように、昔の日本人は外国から訪れる他者や文化を「野蛮」と見做し、自身の文明的後進性を自覚していなかった。そのために彼らの顔はグロテスクで動物的な相貌として描かれた。このように美醜の判断には様々な政治的関係や権力構造が織り込まれていることから、絵画で表現された顔を根拠に美人観の変化を主張することはできないのである。

しかし一方では、顔の魅力についての意見の一致は、判断される人の性別や人種や年齢に関係がないと、心理学者のレズリー・A・ゼブロウツは主張する。「同じ文化に属する人びとに写真に写った顔の魅力を判断させると、大きな意見の一致がみられ、判断される顔が一般的な人から選ばれ、美人コンテストに出場するようなずばぬけて魅力的な人がいないときでも、中程度の意見の一致が見られる」という。⁵レズリーによれば、好感がもたれる魅力的な顔とは、「平均的な顔」ということになる。

まず第一に、平均的な顔にはなじみがあるからで、人は慣れ親しんだものを好むというれっきとした証拠がある。たとえば、アメリカ人は男女ともに赤毛を嫌うが、赤毛は統計的に少ない。慣れ親しんだものを好むのは、“美しいものとは、たやすく知ることができてわかりやすい”というカントの説にも相通じる。平均的な顔が魅力的である第二の理由は、進化的淘汰圧がはたらいて集団の平均に近い特徴をそなえた人が好まれるようになるということである。というのも、このような人は有害な遺伝的突然変異を持つ可能性が低いのである。⁶

慣れ親しんだ「中程度」な顔、すなわち「顔の同質性」が認められるとき、その対象は好意的に受け入れられる。好感を持つことと美の判断は必ずしも同一ではないが、「平均的な顔」に対しては、美しいとか可愛いと認めたときと同じような情緒反応が起きる。日本顔学会の報告では、モーフィングによって東大生22人の平均顔を合成したところ、異なる顔の部位が平均化されることでバランスのとれた美男子になったという。「平均をとる前のそれぞれの顔には当然個性があります。ところがある集団について平均をとると、それぞれの顔の個性が打ち消されて、むしろその集団に共通の顔の特徴だけが浮き彫りになってきます」と原島博はいう。⁷「平均的な顔」に好感を持つという受容態度がここでは証明されたにしか過ぎないが、美人とは何かという答えではないにしても興味深い結果である。

3 理想的な身体

「美人」には人種、文化、歴史を超えて普遍的な基準が存在するとする見解には、プラトンのイデア論やカントの著書『判断力批判』（1790）における美学の援用が判断の拠り所とされる。いわゆる美と呼ばれる特徴が客観的・普遍的に存在するという「美の神話」である。西洋美学において、「美」は「善」であり、「醜」は「悪」として退けられる。カントによれば「美は、概念なしで、普遍的な適意の対象として表象されるもの」だ。ようするに、美は何のためにあるか分からないが、美の判定は「目的なき合目的性」を持っている。そのため、私たちはそれを美しいと感覚する。だから、「美人」はすれ違った瞬間に理解でき、部屋に入ってくるいなや周囲までも明るく輝かせる。美はそれ自体で発見され、視覚的な「快楽」を与えるのというのである。乳幼児にしても複数の顔の中から美しいものを本能的に識別し、凝視するという。乳幼児が美のイデアをそこに発見するのかどうかは分からないが、左右非対称のものより左右対称のものを好ましいと感じるという興味深い研究結果もある。⁸

なるほど、私たちの眼差しは、快楽である「美人」を常に求めているのかもしれない。MITで人間と脳

⁵ レズリー・A・ゼブロウツ『顔を読む 顔学への招待』大修館書店、1999年6月、177ページ

⁶ レズリー・A・ゼブロウツ『顔を読む 顔学への招待』大修館書店、1999年6月、195ページ

⁷ 原島博『顔学への招待』岩波書店1998年6月、73ページ

⁸ ナンシー・エトロフ『なぜ美人ばかりが得をするのか』草思社、2000年12月、44ページ

の認識力に関する研究を行ったナンシー・エトコフによれば、「私たちは他人の外見をつねに採点する。私たちにそなわった美の探知機は、けっして動きをとめない。魅力的な顔だちを目にすると、自動的に親しみを感ずるか否かを判断する。美の探知機はレーダーのように周囲を走査する」⁹という。

顔は常に眼差しによってスキャンされ、私たちは見ることによって「美人」のイメージを所有したいと願う。こうした美の条件は、物が本来備えている特徴、あるいは物が見る者に呼び起こす刺激的な快感であると言い換えることができる。プラトンのイデア論の概念にしたがえば、人々が外見を評価するとき、心のどこかに理想的な美が在る（宿る）ことになる。「美人」の容貌は、美が放つ光の影のことだ。つまり「美人」の規範は人間理性を超えたところに置かれているため、私たちには関与できないのだ。

しかし、私たちは永遠に「美人の実体」に近づくことはできないのかもしれない。実際にはない「美の理想（＝イデア）」と現実の容貌を比較するのだから、美の似像である「美人」は、「美の実体」に対する影である。物でない影は所有できない。この隔たりが「美人」を希求する本能へと結びつく。そこでルネッサンスの時代には、もう少し具体的に整理し、ある理想的な比率が人間の身体や顔に「美」をもたらすと考えた。たとえば、額の生え際から眉まで、眉から鼻孔まで、鼻孔から顎までが均等に三等分される顔が「美しい」とされ、耳の長さや鼻の長さが同一であること、目と目の間の距離が鼻の幅と同一であること、口の幅が鼻の幅の1.5倍であること、鼻梁の角度が耳のついて角度と平行であることが「美人」の条件としたのである。基準、規範をもとに「美人」のシミュレーションを創造すれば、「美」の代理所有が可能となる。

（黄金分割）を美の原理としてあがめた古代ギリシャ人が美の比率や分割に目覚めたのは、人間の肉体を美化した美意識からであった。もともと体育やスポーツ競技に熱心であったギリシャ人は、人間の肉体に潜む均衡の美の原理をプロポーションに求め、理想的な肉体美の象徴として人体の立像をつくった。古代オリンピックの競技の優勝者ドリフォロスをモデルとした理想の肉体を彫像にしたて、これを理想の人体モデルとし、カノン（Canon）とよんだ。以降カノンの法則として彫刻作家の美の規範となった。この人体比例は頭部の大きさを身長七分の一としたもので、後に彫刻家、リシッポスの人体比例では八分の一、つまり八等身となり、今日まで美人型の人体比例の基準となっている。¹⁰

この基準は絵画や彫像における理想像として考えられたものだが、西欧における整形手術にもこの比率が、「美しい顔」の基本として、強い影響力を持った。アメリカにおける美容整形の現場をルポしたアレックス・クチンスキーは、「マスクマン」との呼び名で知られる美容整形医師スティーブン・J・マルクワルトの黄金分割を応用した美容整形を紹介している。マルクワルトは美しい顔を分析し、それらすべてに共通する数学的構成が存在するののかという研究を進めるなかで、黄金比を発見し、それを顔に当てはめて利用するマスク状のテンプレートを開発した。

マルクワルトにとって顔の美は、数学的に定量化できるものであり、その数字をマスク状のテンプレートに置き換えればよかった。しかしそこから再造型される顔は、美の基準に当てはめたものの、人間のアイデンティティが失われたどれも同じ顔で型にはまった美だとクチンスキーは批判する。「美とは何かを真にわかっている人はいないからである。美しい顔は左右対象で、調和の取れた面と形からできている。しかしルネッサンスの芸術家でさえ、結局は彼らの大理論を放棄した。美にはもっと不穏で複雑で意外な概念が存在するからだ」¹¹。

⁹ ナンシー・エトコフ『なぜ美人ばかりが得をするのか』草思社、2000年12月、19ページ

¹⁰ 三井秀樹『形の美とは何か』NHKブックス、2000年3月、62ページ

¹¹ アレックス・クチンスキー『ビューティ・ジャンキー 美と若さを求めて暴走する整形中毒者たち』バジリコ、2008年3月、168ページ

4 美人は遺伝子が選ぶ

近年、美人＝遺伝子が選んだ人であるという遺伝子決定論がもてはやされている理由には、以上見てきたように、「美人」の基準や本質が容易に見出せないからだ。ようするに決定打がないのである。私たちは、ある人を「美人」である、「美人」でないと感じ的に判断することはできる。しかしなぜその人を「美人」としたのか、その理由は不明瞭で定かではない。しかし、魅力のある人、可愛い人という話であれば饒舌に理由を説明することができる。対象に加えられた要素を説明すれば良いのであり、個人的なユニークな見解であってもなんら問題にはならない。しかし「美人」であるかないかといった問いの場合には、美という根源的な概念を言葉で説明しなければならず、そこに困難が生じるのである。美のアイデアが映す影を「美人」としたプラトニズムの見解に、理由を超えて納得するのは、「美人」であるかないかの判断を主知的人間の外に求めることができるからである。

だが、社会生物学や進化生物学の分野では、美学やアイデア論を敷衍した見解ではなく、美人であるかないかの根拠を遺伝子が選んだ結果の反映とする。たとえば社会生物学の蔵琢也もその一人だ。

ヒトの配偶者の選択において容姿容貌の美醜の影響は、それが奨励されないにもかかわらず、きわめて大きな影響を与えている。また、ヒトの配偶行動にも、他の哺乳類と同様な性差がありうる。雄も子育てを手伝う種であるヒトの場合、平均的に言えば、女は男より配偶相手の社会・経済的地位を重視する。また、男は性欲を重視し、女は愛情を欲するという性差がある。これらの現象には、雌の子供の数は限られているのに対し、雄は雌より遥かに多くの子供をつくる能力があるという性差に由来している。

12

蔵によれば、遺伝子によって「美人」は不可避免的に選ばれるもの、美の快楽を求めるのは人間の生物学的生存の本能ということになる。また蔵は「美の元型」、すなわち容姿の美醜の起源も脳科学的によって説明可能だとする。

まず、目を最大の基準として生物の向きや顔の位置を認識する機能を持つ、古くから存在した脳回路を基にして、霊長類では刺激図形がどれだけ顔らしいかを判定する脳内回路が進化している。そのもっとも顔らしい図形を“顔の元型”と呼ぼう。また元来、美しさの感覚とは、外界の情報を分類するに当たって、その調和の程度を測定する感覚として進化したものである。この二つの機構が結びついて、より顔らしい刺激情報に対して美を感じるようになったのである。この時点で言えば、“顔の元型”が“美の元型”に進化したのである。そして現在、ヒトに性淘汰を及ぼしている。つまり現在の人間の顔の美の認識は、顔の形の刺激が入力されると、それが「美の元型」に後天的に修正を加えてできる「現実の美の基準」とどれだけ合っているかを評定して、より合っているほど美しいと出力する認識回路によって行われているということである。¹³

しかしながら、蔵は「美の元型」や「現実の美の基準」を具体的に示してはいない。しかも、「人の美醜は顔の各パーツや輪郭の極めて微妙な差異に基づいている」と述べ、「ある人の容姿が良いか悪いかが見える場合でも、実際に計測してみると大した差がなかったりする。ヒトの顔の認識自体が極めて微妙なものなので」と問題を曖昧なままに放置する。「美の元型」という単一性の問題に言及しておきながら、「美の元型」は各個人によって異なるというのでは説得力に欠けるだろう。

¹² 蔵琢也『美しさをめぐる進化論』勁草書房、1993年6月、25ページ

¹³ 蔵琢也『美しさをめぐる進化論』勁草書房、1993年6月、103-104ページ

だが、こうした社会生物学的な見解は、美学より科学を絶対とする現代社会においては思いのほか説得力を持つものであり、ナンシー・エトコフも「美にたいする人間の敏感さは本性であり、言い換えれば、自然の選択がつくりあげた脳回路の作用」だと主張する。

私たちがなめらかな肌、ゆたかで艶のある髪、くびれた腰、左右対称の体を好ましく感じるのは、進化の過程の中で、これらの特徴に目をとめ、そうした体の持ち主を配偶者に選ぶ方が子孫を残す確率が高かったからだ。¹⁴

ようするに「美人」とされる「顔」の特徴とは、繁殖に適したことを明示する顔、つまりは性的魅力を発散させている相貌ということなのだ。彼らの意見に従えば、化粧や整形によって好ましいと思われる身体を人工的につくりだすことは、脳に仕組まれた自動的な反応、ということになる。化粧や整形は優秀な遺伝子を持った配偶者選びという目的に従って施されるのである。

5 メディアがつくる現代美人

ここまで美人に関する多様な意見を概観してきたが、最期に現代の美人像はメディアが作り出している要因も大きいことも指摘しておきたい。

人が美人を語る時、心のどこかに理想的な美の形がイメージされている。それに符合する対象、類似するイメージがある程度重なったとき、その対象を美人と認識する。「美の元型」が、脳回路によってつくられたものであるかないかは別にしても、後天的に「現実の美の基準」に同調し「美」の変更が行われることはあると認めざるを得ない。たとえば、人気のある歌手や女優に似せて、しばしば「美人」の規範は移り変わっている。流行のように「美人」と言われる人の顔は時代の流れと共に変化しているのだ。その意味では、「美人」は「普遍的」なものではなく、「美人」に対する行動や思考はメディアが発信する「美人」のイメージに左右されているのである。ジェンダー論の小玉美意子は「美人」のイメージの大部分は、マスメディアによって作られている、と主張している。

現代の美女のイメージは、テレビというメディアの出現により、いっそう画一化され、多くの人が同じ価値をもって同じイメージを崇め、同じように真似をするようになった。もともと男性社会のところへ、テレビ・メディアの特性が顔や体などを強調し、テレビの商業主義がそれをさらに即物的にした。それに乗せられたわたしたちは、女性を「モノ」扱いすることに抵抗を感じず、大切な自分自身の精神を売り渡してしまっている。¹⁵

雑誌やテレビに登場する「美女」たちは、「女性は美しくなければ価値がないかのように宣伝し、視聴者自身に美しくなりたいという願望をかき立てる」と小玉はいう。

確かに、テレビドラマやCMに登場する女性が、「美人」の参照例であることは疑う余地はない。それが衣装と化粧と髪型によって作られた偶像であったとしても、さらには整形美容の疑いがインターネットで噂されていようともお構いなしである。だから、美容整形の現場においても具体的にタレントや女優の名前を挙げ写真を持ってくる女性も多い。「美人」という曖昧な対象には、美人度を計測する物差しや基準がないために、すでにテレビという検閲装置を経た「美人の類型」をお手本として模倣するしかない。美容整形の歴史に詳しいアレックス・クチンスキーは次のように語る。

¹⁴ ナンシー・エトコフ『なぜ美人ばかりが得をするのか』草思社、2000年12月、85ページ

¹⁵ 小玉美意子「現代美女」をつくるテレビ、小玉美意子編『美女のイメージ』世界思想社、1996年2月所収

女性が文化的偶像に似た容姿を持ちたいと思うのは、もちろん今に始まったことではない。六〇年代のツイッギーしかり、その前のアンジー・ディキンソンしかり。だが今日の患者がパメラ・アンダーソンを見る目には、はるかに恐ろしいものがある。美容整形を受けたことを隠さずに胸を張るアンダーソンを、美の規範として見ているのだ。人間らしいものよりも作り物を、真正な自然の形よりも模造品を上に見ているようではないか。¹⁶

さらに付け加えるのなら、テレビや雑誌によって「美しい」と称賛され、選ばれた「美女」たちが一様に若い女性であることは留意すべきであろう。テレビとは「美人」の陳列ケースであり、タレントや歌手たちは、「商品」として価値があることをその魅力をもって主張している。マスメディアは、「美人」を準備し、それを具現化したタレントや歌手たちを、現代流にアレンジして、交換可能な商品として提供するのだ。

現代の「美人」が交換可能な美の商品であるから、そこには社会的に無味乾燥な完成品であることが課せられるのであろう。社会学者のナオミ・ウルフは、美への信仰は男性支配を確保するために有効な切り札だという。そして現代社会の特徴として、女性の進出を阻むための政治的武器として、「女性美」のイメージが利用されているのだと。

フェミニズムに対する巻き返しは今これほど激烈なのは、女性に関する古いイデオロギーのなかでも、美のイデオロギーこそ今に残る唯一のものであり、しかも本来ならフェミニズムの第二波でほとんど支配不可能になったはずの女性たちを支配してしまう力を、いまだに持っているからである。この美のイデオロギーは近年さらに力を増して、母性、家庭志向、貞節、受動性という神話ではもはやなしえなくなった仕事を肩代わりするようになった。フェミニズムが女性のために具体的にかつ公然と勝ちとったあらゆる成果を、美のイデオロギーが心理的にかつひそかに覆そうともくろんでいるのだ。¹⁷

ナオミによれば「医療による女性管理」、すなわち「美容整形」の発達は、美のイデオロギーを推し進め、「美」を商品化させる仕組みの象徴でもある。しかも、フェミニズム運動が獲得した成果を手放さなければいけないほど、この古いイデオロギーは強力に作用する。

美のイデオロギーは現代社会においては劣等感を養分にして胚胎するものだ。美が商品であれば、所有すべき対象となり、「貨幣」のように流通可能なものとなる。だからこそ美容整形は手っ取り早い劣等感の解消手段なのである。エリザベス・ハイケンによれば、美容整形を正当化する決め手となったのは第一次世界大戦前にウィーンの心理学者アルフレート・アドラーによって提唱された「劣等感」という概念であったという。アメリカ人にとってフロイドの精神分析は難解でかつセックスに拘りすぎているように感じられ、納得のいくものではなかった。その時代、共感されたものが美に関する「劣等感」であり、アメリカ社会が基本的に競争原理によって支えられていたことに要因があるというのがハイケンの見解だ。

一九二〇年代および三〇年代のアメリカ人の意識によれば、美は遺伝ではなく、努力して獲得するものだった。この時代、美しくなりたいという思いは新たな、そして差し迫った欲求として定着した。メディアや広告業界はそんな風潮を歓迎し、美容整形による変身願望をあおった。¹⁸

16 アレックス・クチンスキー『ビューティ・ジャンキー 美と若さを求めて暴走する整形中毒者たち』バジリコ、2008年3月、151ページ

17 ナオミ・ウルフ『美の陰謀』TBSブリタニカ、1994年4月、13ページ

18 エリザベス・ハイケン『プラスチック・ビューティー 美容整形の文化史』平凡社、1999年5月、161ページ

テレビや雑誌、広告などのメディアにおける「美」の表象にしても、そうした観点から再検討する必要がある。そこではプラトニズム的イデオロギイに美の本質を回収することはできない。美は不変であるものではなく、進化論的作用を受けるものでも、優生学的に選択されるものでもない。それは資本を投資すれば、獲得できるものと捉えられている。美容整形の広告や華やかなモデルやタレントの魅力的な振る舞いは、美の体現者こそが成功者であると煽り立てる。記号化した彼女たちこそ、現代の「美人」なのである。

それでも獲得した美を奪い去ろうとするものがある。つまり加齢による美の劣化作用は不可避的な脅威だ。その強迫観念は、「若いこと」が善であると語り、「若くないこと」が悪であり、時には無価値なのだと迫ってくる。再び、ナオミの見解を引いてみたい。

ある時代が美しいとする女性の特質は、その時代が好ましいと思う女の行動の象徴にすぎない。美の神話が規定するのは、実は容姿ではなく行動なのだ。女たちを分断するために、この神話に女同士の競い合いが組み込まれてきた。女の若さと（最近までは）処女性は、人生経験が乏しく性的にも無知であることを示すものだから、「美しい」とされてきた。女が年をとるということは、“美しくない”ことなのだ。¹⁹

加齢によって美の劣化作用が起きることは、若さを規範とした美をめぐる言説が大量に流通している現在において、避けがたい恐怖として迫ってくる。「美のイデオロギイ」とは、若さへの崇拜、いわば、失われ、損なわれる「美」へのロマン主義的憧憬なのである。美しさは、加齢とともに、損なわれ、欠けていく。「若さ」に対する劣等感、実際の容姿の美醜に関係なく誰もが抱かざるをえない宿命なのだ。アンチエイジングにかける努力とは、結局のところ「若さ」を美の規範とする劣等意識の自己表明であり、一時的な延命措置に過ぎないのである。

言うまでもなく、こうした「美人」のイメージは、メディアを介して大量に流通する「視覚的イメージ」が大きく関与している。ここでの「視覚イメージ」とは、礼拝的価値を持つ絵画ではなく、複製技術による代理表象、すなわち「写真」「映画」「テレビ」「雑誌」などによって反復されるものあり、この反復可能性がその時代の美人のステレオタイプを形成していく。

多くの女性が外見にこだわるようになった背景には、日常生活のなかに「写真」ならびに「写真をめぐる行為」が深く浸透し、自己のイメージが画像を通じて形成されているからだ。事実、男性に比べて女子たちは自分の写真を大量に撮る。女子会、プリクラ、セルフイなど、以前に比べ自分自身が画像イメージとして複製される機会は圧倒的に増大した。彼女たちは、どうすれば「写真うつり」が良いのか、どの角度から撮影すれば、可愛く見えるのかを熟知している。つまり、複製される自己イメージがあらかじめ頭のなかに存在しているのである。したがって、レンズに顔を向けるとき、そのイメージをなぞることになる。²⁰

現代の美人イメージへの強いこだわりには、「劣等感」の存在が根底にあるものの、この「劣等感」は優位と見做す比較対象を得てはじめて意識されるものであろう。テレビや雑誌などを介して伝達される大量かつ日常的な「美人イメージ」の受容は劣等感を抱かせる要因となっているのだが、その美しさは、メイクや写真加工などのマニピュレーションによって、「若く（可愛く）見える」ための記号に変換可能であり、模倣す

¹⁹ ナオミ・ウルフ『美の陰謀』TBSブリタニカ、1994年4月

²⁰ たとえば、写真を撮られるときに行うピースサインは、複製されるイメージと自己イメージの齟齬を回避するものだ。それは決してその瞬間を楽しんでしているのではなく、顔の近くにピースサインを置くことで、顔全体を記号化させることに主たる目的がある。極端な例は「変顔」であり、それはさらに手の込んだ顔の記号化である。あらかじめ醜悪なイメージを想定し相貌を変形させることで、複製されるイメージ（美のイメージ）との齟齬を逆説的に回避しようとする。これはイメージ操作による最も手っ取り早い美容整形といえよう。

ることが容易なのである。